

# CGS 2次試験

白石 一郎 陸自61

自衛隊入隊後もまだ難しい選抜試験があることを知ったのは防大2年生の頃だった。1等陸尉の小柄な指導官が体に似合わない大きな黒い靴を重そうに下げて歩いているのを見た4年生が「CGS靴だな」と言った。

「CGSって何ですか」「指揮幕僚課程のことだ、むかしの陸大に相当する陸上自衛隊の学校だ」と言う事であった。

自衛隊に入ってもまだ入学試験があるのか、あの靴一杯の資料を勉強するのは大変だろうなど指導官に同情したが自分の事になるとはつゆ思わなかった。

しかし月日はあつという間に経つ。11年後にCGSの受験が自分の事になった。昭和43年8月、普通科幹部上級課程(AOC、各職種ごと全員受講する)を終了した私は三重県の久居駐屯地、第33普通科連隊第3中隊の副中隊長兼運用訓練幹部として赴任した。33連隊は新任幹部で着任した原隊であり2年間、第10師団司令部に勤務(在籍のままAOC入校)してまた還つて来た。なじみの深い連隊であり駐屯地であった。AOCを卒業すれば1年後

にCGSの受験資格が出来る。しかし根がずばらだから、まあその内やろくらいに考えていた。駐屯地で受験者は1人だったから刺激も少なかった。

ところが8月のある日、中隊朝礼の際、溝田泰一中隊長(陸自54)が「今日からCGSの試験が終わるまで白石副長と酒を飲むことを禁ずる」と言われた。さらに中隊長は来客があると「防大5期の白石君です。来年CGSに入校します」と私を紹介してくれる。これには参った。

演習に行つても管理野営の時は6人用簡易天幕に蛍光灯を付けた机をセツトした勉強部屋を作ってくれる。勉強せざるを得ない状況になった。

それでも中隊勤務は結構忙しい。2回目か3回目につつかれば上等だと思いい回目の試験は模擬試験の積りで受けた。ところがどうしたはずみか受かつてしまった。そして2次試験を受験する羽目になった。

2次試験を陸大では「再審」と呼んだらしい。陸大出身の方に聞いた話だが再審では色々面白い逸話がある。受験生の大尉に試験官が「〇〇大尉、その窓から飛び降りろ」と叱咤し、大尉が2階の窓から飛び降りて腰を抜かした。軽率！落第、だれが外に飛び降りるといった。内側に飛び降りれば良いではないか。まるで一休さんの頓智問

答である。真偽のほどは定かではない。幸いCGSで2次試験はそれほど難しい問題は出さないようであった。

当時、久居駐屯地でCGS卒業者は連隊長・駐屯地司令お一人であった。連隊長は片桐栄一佐(陸士55期)であった。早速、「受験指導をする、連隊長室へ前へ！」がかった。

「何か分かんることがあるか」「まだ準備を始めたばかりですから何が分からないかも分かりません」「そうだろうな！しかし君は飲んだ時は良く喋り面白いから飲んでいったらどうだ」「そうだS-I(人事係主任)、ビールは無いか」「駐屯地記念日以外は隊舎で飲酒は出来ません」「そうか、しょうがないな、しかし最近チューブ入りのアルコールが開発されたと聞いたから調べてみる」

掛け合い漫才のようにきこえるがごく真面目な会話である。「でも連隊長あいつは酒の力で合格したと後々まで言われますから酒はやめときます」「よし分かった。今日は心構えだけ言つてく。僕は2次試験の試験官をやつて一番気に食わなかったのは、3回まわつてワンと言えは通してやると言われればそれをやりそうな受験生が結構いることだ。それだけはやらないでくれ！」「分かりました」と答えて退散した。

連隊長はインパール作戦に小隊長で参戦し約5カ月後の作戦終了時は指揮官の損耗激しく大隊長代理になっていたそうである。解脱した高僧のように酒脱で諧謔味があり若者顔負けのアイディアマンでもあられた。

取りあえず自分で準備を始めた。2次試験は面接試験が「服務」「図上戦術」「原則図解」の3科目であり、そのほかに体力検定と身体検査がある。

一人で準備は大変だろうと富士学校勤務の同期生が2次試験受験体験記(前年の同校受験者10数名)を送つてくれた。それを読むとCGSの面接試験は要するに会話である。提出した試験問題の解答に対して試験官が質問し受験生が答える。その一連の問答の間に受験生の資質を見るのだと言う。問題の解答は会話の素材だから正解を答える事はそれほど大事ではないように思った。質疑応答の間に正解にたどりつけば良いのではないか。そのためには試験官の問いを先ず正確に理解することが緊要であろう。

などと自分なりに体験記を分析して面接試験をイメージアップし、暇な時は絶えず頭の中で想定問答を繰り返した。

1カ月後に師団で2次試験の集合教育があった。模擬試験が終わった後3期生の教官が「君は試験官が質問したら、間髪を入れずタバコハゼのように食いつく。質問を受けたら先ず一呼吸

において、考えを整理して、はい！ 3つあります。1はこれ、2はこれ、3はこれ、というように応答するのだ」と指導された。

一応、神妙に聞いたが、腹の中では「冗談じゃない、それでは会話にならないではないか！」と思っていた。その腹の中を見透かされたのか教育終了後、担当官の井瀬洋夫1佐（陸士59期）が「白石ちよつと」と部長室に呼ばれた。「まあ座れ、先ほど〇〇3佐はあ

あ言ったが、僕は君の答え方でいいと思う」「僕は実は3回落ちた、富士学校にいたが、教えた後輩が皆、合格するのには僕は落ちた。部隊に異動になって4回目を受けることになった、そして考えた、今までどこが悪かったのか、知識や技術はある、受験態度が問題なのではないか、古手の3佐がシヤチホコばつて応答する振る舞いが不自然だったのではないかと思いついた。態度は良い方ではないが聞き直つて自分流でやった」「4回目を受験する者がいる、というので校長が僕の受験状況を見に来たよ」「君も自分流で行った方がいいと思う」（現在は受験回数が3回に限定されているが、当時、回数制限はなかったように思う）

「ところで新制服は作っていないのか、僕は先日作ったから貸してやろうか」と言われたのは恐縮した。丁寧に断り

したが嬉しかった。制服が紺から茶色に替わる時期で新旧混用期間であった。

2次試験の準備はマンツーマンの指導が多く小さな誇りを傷つけられることも無くはなかった。出来れば1回で終わりたいものだと思っていた。

しかし一方では連隊長や井瀬部長だけでなく色々な方々から暖かい指導やアドバイスを受け人間関係が大きく広がった。

これは人生、大きな収穫だと思つた。愛媛偕行石鉄会の大先輩に聞いたが戦前は郷里の後輩が再審を受ける時は東京近辺にいる先輩達が集まつて指導したと言う。先輩と後輩の絆も強くなつた事であろう。

さて約2カ月の準備期間もあつという間に過ぎ本番がきた。

総て終わつて自信があつたのは身体検査と体力検定だけであつた。

少しましかなと思つたのは「服務」であつた。低充足下の普通科中隊の効率的な訓練法や要指導隊員の服務指導等について平素やつていたことを述べたら試験官は感心して聞いてくれた。

「図上戦術」は討議の間に決心を変更にして師団の防衛地域を変えた。「3

時間も考えて決めたことを試験官の質問1つで変えるのか」と厳しく突っ込まれたが、他の試験官が「3時間両方の案を比較考量したのだな」と助け船

を出してくれた。

「原則図解」は試験場に入る直前に見た資料、「隘路を利用する防衛の一例を図示説明せよ」がでた。問題を見た途端、しめた！と思つて先ほど見た図を黒板に描いた。書き終わる頃、はっ！とした。これは隘路を後方にする防衛だ、隘路を利用すると言うより隘路を確保する防衛で最も難しいものではないか。しかし3分の時間はもう切れようとしている。

ままよ！と腹を決めた。

案の定、試験官が「防衛において隘路の利用法はどのようなものがあるか」「その内、最も防衛しやすいのはどれか」「隘路を前方にする防衛です」

「君は何故最も難しい防衛を選んだのだ」実は直前に見たものだからとは言えない。「安易な場合よりも困難な場合を図示すべきだと思ひました。上級部隊の隘路進出援護と言うような任務はよくあることですから」と苦しい説明をした。

5日間の試験は無事終わった。試験官との会話は十分できたし、言いたい事は概ね言うことができたと思つた。合否は別にして爽快であつた。

連隊長に受験の申告をした時「おい！落ちこちたらまた俺と、この連隊でやろうや！君はまだ初めての受験だ、慌てることはないよ。存分に言

いたいことを言つて来い」と送り出された。ところが、その連隊長は夏の人事異動で幹部学校戦術教官として転出されることになった。ダボハゼも悪運強く合格し、連隊長と同じ学校に学生として入校することになった。

茫々50年ちかく前の事をゆくりなくも思い出すことになったが、素晴らしい上司や先輩に恵まれた幸運と、良き組織に勤務することができた幸せを、いま、しみじみと感じている。



当時の東部方面總監部（市ヶ谷）。この建物の一角にCGS教育を行う幹部学校があつた。

幹部学校の校風

## 校風

われらは

ものを正しく見て自分考へ

勇氣と責任をもつて実行し

自らを高め、他を助ることを

知節、清潔、誠實に校風を自掃す